



SPECIAL MESSAGE

今、求められる学力とは。 それをどう育み、評価するか

新しい大学入学者選抜が動きだし、高校現場でもこれまでの学力観の見直しが求められているなか、今、本当に必要とされる学力とは、学びとは何なのか。コンピテンシーや「資質・能力」重視の教育改革において、可能性とともに注意点を指摘している京都大学大学院の石井准教授に伺いました。

取材・文／堀水潤一 撮影／マツダナオキ

京都大学大学院 教育学研究科
准教授 **石井英真**

いいい・てるま●教育学博士(京都大学)。学校で保障すべき学力の中身とその形成の方法論について理論的・実践的に研究。近著に『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』(日本標準)、『中教審「答申」を読み解く』(日本標準)、『教師の資質・能力を高める! アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師へ』、『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業』(共に編著、日本標準)など

「〇〇社会」「〇〇力」という 言葉の向こうに見えるもの

流動化が加速する社会では、転職は当たり前。従来であれば世代交代くらいのスパンで起こっていた社会構造の変化が、一人の人生において複数回訪れる時代が始まっています。私のような研究職もそうした影響を受ける職業の典型。定年を迎えるまでもう一度くらいは、研究スタイルの1からの見直しを迫られるだろうと自分の問題として感じています。これは多かれ少なかれ、どの職種にも当てはまることでしょう。だからこそ流動化が加速する知識基盤社会では、学び続ける力や領域を横断する力、他者と協働しながら正解なき問題に対応する力など、高度で汎用的な能力が求められるのです。と、言っておきながらなんですが、「〇〇社会」や「〇〇力」と言ったとき、その言葉が意味するところは案外曖昧です。例えば「他者と協働する力」と言っても、具体的に何を指すのかは状況により異なります。例えば自動車産業が今、何を競っているかといえば自動運転のシステム構築です。昔ながらのものづくりであれば、徒弟制度のような密な関係の中で技術を磨けばよかった。けれ



図1 資質・能力ベースのカリキュラムの可能性と危険性

改革の三つの志向性	可能性として展開すべき点	危惧する点
学校での学びの社会的有用性を高めていく志向性	内容項目を列挙する形での教育課程の枠組み、および、各学問分野・文化領域の論理が過度に重視され、レリバンズや総合性を欠いて分立している各教科の内容を、現代社会をよりよく生きていくうえで何を学ぶ必要があるのか(市民的教養)という観点から問い直していく機会となりうる。	社会的有用性を高めていくことが、経済界からの要請に応え、「国際競争を勝ち抜く人材」や「労働者として生き抜く力」を育てることに矮小化され、早期からの社会適応(個人の社会化)を子どもたちに強いることにつながりかねない。
全人教育・全面発達への志向性	「学力向上⇒教科の授業改善」という図式に限定された人々の視野を広げ、教科と教科外、さらには学校外の学びの場も視野に入れて、子どもの学習環境をトータルに構想する機会としても位置づける。	「〇〇力」という言葉を介して教育に無限責任を呼び込みかねない。全人格や日常的な振る舞いのすべてが評定のまなざしにさらされかねない。
学びの活動性・協働性・自律性を重視する志向性	認識方法面(プロセス)から目標や教科の本質をとらえることで、「1時間でこの内容をこの程度までは必ず習得させない」という認識内容面の学問的厳密性の要求(教科を学ぶこと・正解を学ぶこと)をゆるめ、学習者主体の試行錯誤を含んだ思考やコミュニケーション(教科すること・最適解をつくること)を許容しやすくなる。	カリキュラム上に明示された教科横断的な汎用的スキルが一人歩きすることで、活動主義や形式主義に陥る。とくに、思考スキルの直接的指導が強調され、しかもそれが評価の観点とも連動するようになると、授業過程での思考が硬直化・パターン化し、思考する必然性や内容に即して学び深めることの意味が軽視される。

学校に対する期待が高まり 求められる学力にも変化が

こうした社会変化を受け、今、先進諸国では「何を教えるか」といった内容ベースではなく、それを通じて「何ができるようになるか」も重視するコンピテンシー(資質・能力)ベースのカリキュラム改革が進んでいます。これについても、可能性だけではなく、注意すべき点があることを正しく認識する必要があると思います。

どソフトウェア開発で大事なものは熟練よりもアイデアです。すると、気心知れた同質の集団よりも、自分と違う専門性をもった他者と二緒のほうが新しい発想を生み出しやすい。しかもアイデアを生み続けることが重要なため、繋がり自体を変化させることが有効に働きます。そう考えると、協働的な学びと言っても、日本社会が大切にしてきたコミュニティのそれというよりは、SNSに代表される、ゆるい繋がりのほうこそ親和性があると言えなくもありません。

まず前提として、能力一般(コミュニケーション能力などの社会が求める実力)の形成は、学校だけではできないということ。学校教育には限界があり、そうした能力一般は、家庭や地域、もしくは社会に出てから実生活において伸ばす部分でもあるわけです。そもそも、学校教育とは書字文化の発達や科学の発展をベースに成り立ってきたもの。「リテラシー」という概念が学校教育に馴染むのもそのためです。

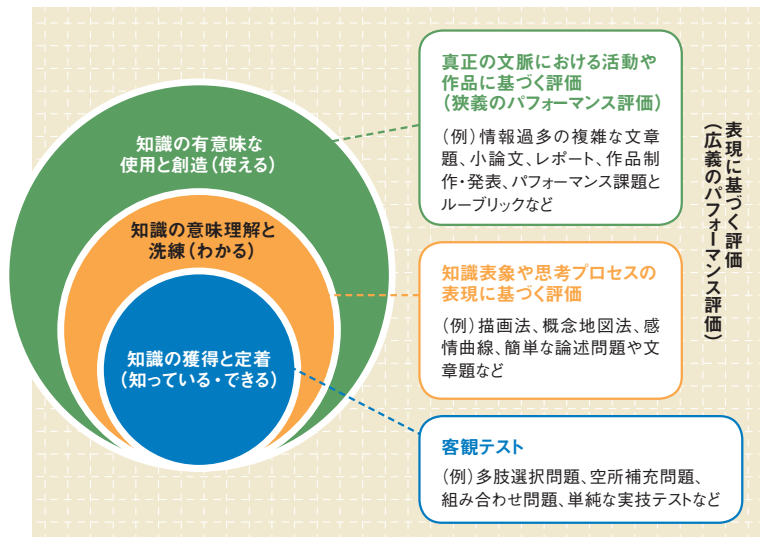
しかし、学校教育に期待される役割は変わってきました。家庭や地域における人間形成機能が低下し、かつ人材育成をコストと考える企業も増えてきた今、何らかの形で学校が担わざるを得なくなってきたのです。なのに「学力」と言ったときの一般的なイメージは「教科内容に則して形成される認知的な能力」に偏ったまま。そこそそ学習指導要領の改訂や高大接続システム改革等で、「資質・能力」という言葉が多用されている背景です。社会の求めを踏まえて学力の中身を再検討しよう、一般的

資質・能力ベースのカリキュラム 改革の可能性と危険性

前置きが長くなりましたが、資質・能力ベースのカリキュラム改革自体を否定するものではありません。時代の要請ですし、目の前の生徒の学校生活を生き生きとしたものに変える可能性も感じています。とりわけ、学校から社会への渡りがうまく機能していない現状において、社会との関係から学力を問い直すきっかけになる点に期待しています。今のカリキュラムは「何のために勉強するのか」という問いに答えることが難しいくらい、生きることとの関連という視座に欠けています。しかも教科間の連携が少なく、総合性を欠いている。そうしたなかで鳥瞰的視野や教養をもつ人間を育てられるでしょうか。すべてを学校教育に押し

社会に適應するだけでなく、
よりよく生きていくために

図2 学力・学習の質の三層構造と評価方法



つけるものではないとしても、社会との繋がりを意識し、一人前の市民に育てることは後期中等教育に課せられた重要な役割だと思うのです。

この他、図1にも示した通り、資質・能力ベースのカリキュラム改革にはいくつもの可能性があります。一方で危険性も内包しています。

まず、先ほどから述べているように、本来万能ではない学校教育に無限の責任を負わせかねないこと。特に「〇〇力」という言葉が一人歩きすること、あたかも学校教育によって

「知っている」「わかる」「使える」の三層構造から考える

こうした危険性にも目を配りながら、では、高校の教科指導にはどのような工夫の余地があるでしょうか。

て意図的・計画的に形成できるという幻想を抱かせかねないことです。

また、人格や日常のふるまいまでが評価の対象になると、学校生活に不自由さをもたらしかねないという懸念です。確かに積極的、社交的など、社会で評価されやすい気質をもつ生徒は活躍の場が増えるかもしれません。しかし物静かな生徒もいますし、それがその子らしさだったりします。彼・彼女らにとっては、自分丸ごとが常に評価のまなざしにさらされているようで息苦しいはず。性格の強制にもなりかねません。

もう一点。学校教育は経済界が求める人材、特にグローバルエリート育成だけが目的ではないこと。多様な生き方を希求する時代、経済的合理性だけでキャリアを考えては無理が生じます。複雑な社会とうまくつき合いながら、しかしそこに染まり切らず、自分の頭で思考し、よくよく生きていく。そうした自立した個人を育てることこそ学校教育の使命ではないでしょうか。

一般に、教科内容に関する学びの深さ（学力・学習の質）は図2のように三層構造で捉えることができます。「知っている・できる」「わかる」「使える」というレベルです。

このうち日々の授業は「わかる」レベルを目指したものだと思えますが、個別の知識の意味理解を積み上げていくだけでは、「使える」レベルにはなりません。そのため、折に触れて「使える」レベルの課題を意識する。英語であればプレゼンテーションやディスカッションの機会です。それにより、日々の「わかる」授業の質も変わり、

教科学習の魅力は、教える内容だけではなくプロセス自体にもあり

知識の意味のわかり直しや、知識の定着も促されます。基礎から積み上げていく学びだけではなく、基礎に降りていく学びの実現です。

もったいないのは、せっかく授業や単元の導入部で生活場面を題材に豊かな学びが展開されても、その後、抽象的な教科の世界で学習が進みがちな点。しかも、単元や授業の終末部では、問題演習など無味乾燥な学習に収束する。こうした尻すば

みの構造では、結局は機械的に問題を解くことがすべてという誤解を与えかねません。尻すばみではなく、末広りの構造への転換が大切です。

ここで留意点をつ。「使える」レベルとは、知識を実生活で生かすことのみを指すわけではないこと。発見や創造の喜びなど、学ぶプロセス自体に面白さを感じるような、あたかも、その分野の専門家が知を探究する過程を追体験するような本物の





子どもたちの課題から始まり、 子どもたちの未来に還していく

授業になっているかということです。

教科の魅力や本質といったとき、内容の面白さに目が行きがちですが見落としやすいのがプロセスです。実際、歴史の先生は、時代のつながりやストーリーを紡いでいく点に面白味を感じ、教材研究などを通じて「歴史学」を堪能した結果生じた解釈を授業で楽しそうに伝えています。数学の先生も、複数の解法を黒板に示したうえで、「どちらの解き方が良いかといえば、こちらがいい」とやはり楽しそうに解説する。なぜ、そ

うしたプロセスを生徒に体験させないのでしょうか。ここ一番のタイミングでグループ学習などを導入することはできるはず。教科の一番おいしいところを先生が独占してはいけません。

パフォーマンス評価と 大学入学選抜の改革

では、「使える」レベルの力をどう評価すればいいか。「わかる」までの学習であればペーパーテストが有効でも、「使える」レベルにはなじみません。運転免許取得時に技能試験がある

ように、実際に運転させないことには評価できないのと同じです。パフォーマンス評価は、それを解決する手段として登場しました。学習者の作品（パフォーマンス）やふるまいを手がかりに、概念の意味理解や、知識・技能の総合的な活用力を測る評価手法です。狭義には、学習者の実力を試す課題（県のPR企画を提案する社会科の課題や食事制限者向けの献立を作る家庭科の課題など）を課し、実践させてみて、活動や成果物を評価すること。広義には、授業中の発言や行動、ノートやレポートの記述から、日々の学習活動のプロセスを形成的に評価することまで含みます。思考力・判断力・表現力等、見えにくい学力を評価する方法として注目されています。

がら、もてる知を総合するわけで、他者はもちろん、自分との深い対話を経て、形にしたものだからです。

ペーパーテスト、しかも一発勝負の試験では測れる力に限界があります。その点、選抜型から選考型へ、マッチング型へのシフトが起きつつある大学の入学選抜も、こうした考え方に基づき、高校時代の諸活動なども材料にしながらトータルに選考するようになってきています。実際、考える力を測る素材として、学習活動の中で生み出された論文ほど適当なものはないと思います。そのプロセスにおいて、さまざまな人と議論しな

アクティブラーニング（AL）やカリキュラム・マネジメントなど、今回ほど、横文字のキーワードが踊った学習指導要領の改訂はないでしょう。現場としては「あれもこれもしなければ」と戸惑うわけですが、「一つひとつが繋がっていると考えたらどうでしょう。何のためのALかといえば資質・能力を育むため。その資質・能力をどう評価すればいいか考えたとき、多面的な評価が必要であり、なかでもパフォーマンス評価が有効になる。そうしたカリキュラム改革を進めるためには、教員の力量形成やチームとしての取り組み、学外のリソースも必要になるし、前提として、どういう生徒を育てたいかという議論も重要になる。それこそカリキュラム・マネジメントです。

さらには、そうやって育んだ広義の学力が、生徒の将来にも繋がる形で、適切に評価されるよう大学入学選抜の改革も進んでいる。すべて根っ子の部分で繋がっているのです。一連の改革を受け流さず、目の前の子どもたちの課題から出発し、ぜひ子どもたちの未来へ還してください。